鍾路の変容を通してみるソウルの近代化に関する一考察

—大韓帝国期(1883-1910年)の新聞記事を題材に—

RESEARCH ON THE MODERNIZATION OF URBAN SPACE IN CENTRAL SEOUL

Focusing on the Jong-Ro district in the Korean Empire period (1883-1910)

金 銀 眞*

Eun-Jin KIM

The aim of this paper is to make an investigation into the modernization of urban space in the Jong-Ro district of central Seoul. Using primary material drawn from a detailed review of the newspapers of the period under study, two distinct dimensions to the analysis are described: (1) newly appearing urban functions, corresponding to “modern” urban space; and (2) transformations to pre-existing urban activities and functions under modernization. Under the first category, new political and cultural uses were identified, along with a new recognition of these novel urban facilities. Under the second category, the consumption spaces of Jong-Ro, the official road for the procession of the King, and urban planning processes are identified as beings continuations of earlier patterns from the preceding Chosun Period.

Keywords: Jong-Ro, Seoul, urban space, modernization, newspaper, Korean Empire Period

鍾路、ソウル、都市空間、近代化、新聞、大韓帝国期

1. はじめに

本稿は、ソウルの中心をなした鍾路一帯の街並み及び都市空間が持つ役割がどのように変化してきたかを史料を通じて明らかにすることによって、ソウルにおける近代都市への変遷過程を明らかにする。

内容的には、大きく二つに分けられ、前近代からもっていた都市空間における性格の継承や変貌の側面と、近代的¹都市空間の形成と変容の側面から構成される。

漢陽(現在のソウル)は、朝鮮時代が始まり、1394年(太祖3年)に開城から遷都されて以後、現在に至るまで韓国の首都として存在している。漢陽は、城郭で囲まれており、王を中心とする中央集権社会を体現していた。漢城府の城郭内では、「まず宮闕・宗廟・社稷・官衙・道路・溝渠・市廛などの敷地が選定され、その残りは王族以下」²の両班³の住宅を中心として構成されていた。

その後、500年の歴史を持つ朝鮮後期の鎖国政治は西欧によって開港されるに至る。その結果、ソウル⁴の城郭内の秩序が壊れ始め、都市空間には多くの変化がもたらされた。政府は1876年江華島条約を締結し、門戸を開放しながら、日本と清の文物を視察するための紳士遊覧団と領事使を派遣するなど、富国強兵を目的とした一連の開化政策を推し進めた⁵。特に、甲午改革⁶により西欧文物の導入は本格的に始まることになった。

特に、鍾路の一帯はその中心地と言われ、「建国後、国家による公廊(=官設店舗)の建設によって形成された鍾路の商家は、現在に至るまでソウルの中心商家として機能してきた」⁷。かつて鍾路を中心とする道路に沿って市廛⁸と呼ばれる店舗があった。市廛というのは、官設店舗として商人たちに賃貸された店であった。この商人は、特定の商

品を独占して売の特権を得る代わりに、官府の収用品を捧げる納税の義務が課せられた御用商であった⁹。そうした市廛のもっていた乱塵¹⁰を禁じる権利は、その後、六矣廬地区を除いて全て撤廃されるに至った。これがいわゆる辛亥通共である(正祖15年、1791年)。その結果、ソウルにおける私商の商家¹¹が生まれていた。こうした鍾路の一帯は大韓帝国期に入ってから、近代的都市空間を形成し始めていた。

そのようなソウルの近代化過程についての先行研究は、都市の形態及び構成に関する研究¹²にほぼ留まっており、近代における都市空間のあり方・その変貌などを含め、当時の人々の目から見た都市空間に関する視角が欠落していた。そこで本稿では当時実際に都市空間が人々によってどのように認識され、使われていたのかを分析することで、先行研究の欠を埋めることにする。

大韓帝国期(1883-1910年)の都市空間の変遷に関する史料はほとんど残されていない。しかし、この時期における都市の生活や現象がよく記録されているものとして新聞をあげることができる。「当該都市に固有の新聞や雑誌があれば、人々がその都市に何を求めたかの像が見えてくる」¹³と言われるように、新聞には一次史料として用いる価値があると考え、本稿では、主に『新聞』や公文書としての『承政院日記』¹⁴を用いる。大韓帝国期において新聞は1883年(高宗20年)に発行され始め、様々な西洋の近代文物の紹介や社会啓蒙の役割を果たしていた。今まで、人文・社会学系においては新聞を史料として用いたことがあるが、建築学において、特に韓国の近代都市史に関する研究では新聞を主な史料として用いられたことはほとんどなく、本稿は今までの研究とは異なる分析の方法を試みることになる。

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 大学院生・修士

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo, M. Eng.

2. 史料について

本論に入る前に本稿の分析で使用する新聞各紙の性格を検討しておきたい。

当時の新聞の種類を、創刊年度順に見ると、まず韓国最初の新聞として『漢城旬報』¹⁵が漢文版として創刊された。その後、一時廃刊されながらも、その名称を変えて『漢城週報』が国漢文版¹⁶として、政府による開化派を中心に発行されていた。この二つの新聞はともに、国民に世界の政治動向や先進国の政治・経済・文化を紹介するとともに、国民の見聞を広げることを目指していた¹⁷。

この次に創刊された『獨立新聞』は、西洋の模倣よりはむしろ、自主独立とその国民への啓蒙をスローガンとしていた。これは全てハングルで作成され、国の発展のための教育を最も重要視していた民間紙であった¹⁸。

『帝國新聞』は、女性や下層民のためにすべてハングルで作成され、彼らを目覚めさせるための民間紙であった¹⁹。『皇城新聞』は、国漢文版として、国内事情や国際事情を国民に知らせ、保守派に伝統文化を新たに理解させようとしていた²⁰。

一方、『大韓毎日申報』は、イギリス人 Ernest Thomas Bethell が発行した民間紙であった。1904 年 7 月 20 日以降韓国駐日軍司令官によって発行前に検閲がなされるようになったが、この新聞だけは発行人が外国人のため検閲の対象から除かれていた。そのため、他紙にはみられない様々な意見を発信していたが、植民地時代に入ってから総督府の機関紙となっていく²¹。

本稿ではこのうち大韓帝国期を分析対象²²とする。ここでは、特に新聞が発行され始める 1883 年から 1910 年の併合の前までの時期に限定して考察を進める。

3. 前近代的都市空間からの性格の継承と附加

3-1 商業空間としての役割

朝鮮時代から漢陽における六矣廬は、官御用(=官設店舗)の並ぶ商業地域であり、小売機能が中心であった。また街並みも統一されていた。そうした鍾路一帯の性格は、大韓帝国期にもその一部はそのまま存続されている。

- 1) 我々は本会を設置する。…これを皇国中央總商会と名づける。…店の地界が東は鉄物橋、西は松橋、南は小広橋、北はアンヒョンの範圍にかかる領域では外国人の商業を許可しない。…『獨立新聞』1898 年 9 月 30 日)
- 2) 鍾路の總商会は昨日午後 1 時に特別会を事務室で開き、總商会を設けることなどを議論した。『帝國新聞』1898 年 11 月 29 日)
- 3) 鍾路の芋布廬と望門床廬には政府により銀行所が設立される。二つの店は綿布廬の周辺の空き地に政府により建ててもらうことが決まった。『帝國新聞』1900 年 9 月 22 日)
- 4) 商業會議所が政府と度支部に屢次(=数度)請願を行い、三十万円の支給の内諾を得たが、三井物産会社と第一銀行には財政顧問の命令が無いとしてまだ(支払いの)決定がなされていない。それにより鍾路市上に錢(の流通)が極めて困難となり、金錢の流通する希望がない。そして昨日から各廬を閉鎖され、その後は酷く惨めな状況である。(『皇城新聞』1905 年 8 月 18 日)
- 5) 鍾路綿紬廬の都家(=問屋)が失火後もなお修復されていないので、修復費用として 1 千六百八十五元十三錢を支出するよう。『皇城新聞』1907 年 1 月 5 日)
- 6) 鍾路における京城樓料理店には由來各人處(=各界からの人々が来店し)…新聞社・政友会・佛教總官会等諸處に、多数の料理を掲げて提供する…『皇城新聞』1910 年 8 月 18 日)

京城案内によれば、鍾路の一帯を「此の通りは昔時最も繁盛を極め露店市をなしてゐた場所」²³として描写しており、一部の市廬が存続していると同時に、近代化に対応した新たな商業施設が登場し始めていた。その例として、西歐式の商業団体である商業總商会(史料 1・2)が設けられていた。この史料は独立新聞であり、「我々」というのは独立協会の意味している。

また、『承政院日記』が「中樞院議官趙秉式捕以總商会長、榜示商

民囑今撤市事」²⁴と記録していたように、官僚と独立協会員がともに主体となって、さらなる商業発展のために設けた總商会は、ただ鍾路の一帯に限定されるのみならず、朝鮮全体を代表し、権益保護を意図するものであったと考えられる。すなわち、鍾路の一帯が他の地域とは異なり、経済的に重要な場所であったため、外国商人の進出を防ぐための団体として設立されたと見られる。

また、金融機関としては日本の第一銀行²⁵の支店が初めて開設されていた。こうした金融機関は全国の開港地のみならず、鍾路の商業について金融にも関与していた。しかしながら、史料 4 によれば鍾路の市廬は寂れ始めており、金融の融資が円滑に進まなかったのが原因と見られる。市廬が廃止された理由は今まで確認できなかったが、本稿によりはじめて明らかになったものである。

しかし、『承政院日記』に「市廬の火災はとてもかわいそうだ。…お金を配って上げる家を建て、生業に安定することができるようにする」²⁶と記録されていたように、当時は火事が多かったが、市廬が政府や市民にとって重要な部分を占めており、市廬の間屋(史料 1・5)が政府により再建され継承されていたことが分かる。金融や火事が契機で市廬(=六矣廬)は崩壊していったが、一部の市廬は空き地に移動され、それと入れかわるように近代的な商業施設の一つである銀行(史料 3)が展開していった。

また近代的な商業施設の一つとして、当時ソウルで最初の料理店として高級料理店の明月館が登場し(史料 6)、その後鍾路の一帯に料理店²⁷などが集中的に設けられていった。

ここでは、朝鮮時代からもっていた商業空間としての役割が以後も大筋としては継承され、ただし建物形態の多様化が始まり、商業の種類や機能においては附加や変化が生じていたことを確認した。

3-2 「御路」²⁸としての役割

鍾路の一帯には、朝鮮時代から宗廟があり、国王が行幸する、「御路」(史料 33)として用いられてきた。

- 7) 皇帝が宗廟に行次(=行幸)した。『帝國新聞』1899 年 12 月 11 日)
 - 8) 皇太子殿下が遊覧することは別項と同じで所経閣路を修築するため、その区域が如左する。大漢門前の美洞及び博覧会門前と、鉄物橋を經由して、安洞別宮門前と紅峴高等学校門前まで…道路と橋梁を一新し修築するの、所入(=必要)経費が四百十七元八十六錢飯量(=くらい)するという。『皇城新聞』1907 年 9 月 12 日)
 - 9) 来月八日乾元節に昌徳宮内秘苑にて園遊会を設けするので、昌徳宮から秘苑に至る道路を修築する。『皇城新聞』1908 年 2 月 20 日)
- ビシヨブ²⁹は舉動(=行幸)について「5 世紀の間、朝鮮の王位を占めてきた王家の祠堂に祭祀しに行く莊嚴な行列であり、舉動の行路には、数万人の民衆が敬虔な静寂の中で自発的に雲集」³⁰していたと述べている。国民の間には、まだ国王に対する尊敬が残っており、国王に関わる行事(史料 7)が続けられていたのである。例えば、高宗皇帝及び王族のため、その周辺の道路(史料 8・9)が改修されていた。こうした道路の改修は、近代化の一過程ではあるが、一般市民のためとは言い難い。ここでは、大韓帝国期の鍾路では国王の行幸する「御路」としての伝統的な役割が継承されており、皇帝や王族のために道路の改修が行われていたのである。

3-3 近代へ向けての都市計画法規

朝鮮時代の初期に作られていた『經國大典』³¹では、都城内部における道路の幅が法として定められていた。「大路は幅が五十六尺、中路は十六尺、小路は十一尺、両側の溝渠の幅は各二尺」³²として定められた都市計画が行われていた。大韓帝国期でも、道路の幅を法で改めて定められていたことが次の史料を通じて読み取れる。

- 10) 九月三十日内部令があった。黃土峴から東大門までと大廣通橋から南大門までは国の大通りなので、家が道を侵すことと川を越えて造ることは法によつ

で当然禁じられる。二つの通りの幅は五十尺・七十八尺のところが多い。今商業が進んでいるので、必ず重要な道なので法を改める。黄土岬から東大門までと大廣通橋から南大門まで道の幅を新たに決めて五十五尺で…道の両側にある空き地は商業者のために庶民たちに官許して仮家を造って、仮家前の柱の高さは九尺で一字の形でして尖りと凹みがないようにする。仮家は草の家ではなく他の材料にする。…官許された仮家は10年間で限定する。『獨立新聞』1896年10月1日)

朝鮮時代の初期に定められていた道路の幅は、後に道路上に仮家³³が作られたために再び狭くなったことが分かる。大韓帝国期の道路の幅は五十五尺として、朝鮮時代の幅に近い形で継承されていたのである。しかし、大韓帝国期から仮家の形態や材料についても法により規定されていた。もちろん、士大夫住宅³⁴に対する規定があったが、大韓帝国期に新たに商業施設の仮家について道路との関係を考慮した法(史料10)が作られていた。この点については、朝鮮時代には法として取り上げられたことがなかった。

大韓帝国期から商業を中心とする政策が始まっていた。商業の発展のため、空き地に仮家を作ることが許可されていた。以前は市廛の特権で仮家が認められないので、庶民の生活保障を受けなかったが、この時期から政府は仮家を認めながら、庶民の生活保障を行うようになることが読み取れる。当時に入ってから仮家に対する材料や形態や期間などが都市計画法規に附加されていたと言えよう。

従って、大韓帝国期の鍾路一帯や中心地の計画には、朝鮮時代から継承された面と、新たに近代的な都市計画が試みられていた面の両面があったと解釈することができる。

4. 近代的都市空間の成立と変容

4-1 政治空間としての役割

朝鮮後期までソウルにおける政治空間は、主に宮闕及び官衙であった。しかし、大韓帝国期から、鍾路の一帯で萬民公同会³⁵が開催されるなど、政治家及び一般市民にとってソウルの中で代表的な政治的な場所として認識されていたことが史料を通じて分かる。

- 11) 三月一日午後二時に鍾路で萬民共同会が開かれた。『獨立新聞』1898年3月13日)
- 12) 今度鍾路で合同会を開催…身分と地位の区別なく、大路に座って国のために一心に合席する。…『帝國新聞』1898年11月2日「論説」)
- 13) 萬民共同会が鍾路で多日(=日々)開会された。『皇城新聞』1898年11月16日)
- 14) 萬民共同会について、四大門と鍾路に掲示する。『皇城新聞』1898年11月25日)
- 15) 昨日上午九時に人民たちが鍾路上に齊会した。後に光化門前へ移動して開催し、燭商(=深く)公議するの、…六曹門前で教演し、…『皇城新聞』1898年12月15日)
- 16) 獨立協会で発起して、萬民共同会を鍾路に開設して、…萬民が一つになって議論するのは初めてのことであり、…『皇城新聞』1898年12月28日)
- 17) 鍾路に萬民が集まる前に皇帝が出て詔勅を下す。『獨立新聞』1898年12月28日)
- 18) 憲政研究会³⁶は今日午後2時塔洞公園³⁷内に通常会を開ける。憲政の研究なしには実行が困難な問題をこの研究会で討論しようとする。『皇城新聞』1905年11月6日)

獨立協会³⁸の主催(史料11-16)によって開催された政治運動は、1898年10月29日に鍾路で行われた萬民公同会をきっかけとして大衆運動として発展した³⁹ことが分かるが、『承政院日記』によれば「29日人民が鍾路に多く集まって官民共同会と呼ばれ、国の腐短(=腐敗)と国民の苦しみについて議論して改革することがあると言って官僚がともに集まりに出て来ることを求めている。…官僚と市民の協商は初めてのことで、…献議された6条を採択した」⁴⁰とあるように、実は市民が求めたことを政府が受け入れたものを官民共同会と呼んでいた。つまり、他の資料では萬民共同会と書かれているが、その実態は官僚と市民がともに行った官民共同の会であった。

この時期より前に市民の政治的な集まりは1898年3月1日(史料11)に始まっており、鍾路が政治運動の場所として用いられていたことが分かる。さらに、萬民公同会は人々によるデモを通じて、民衆の政

治運動としての新たな道を開いた⁴¹。それまでは、王権を中心とする政治体系であったため、一般市民が政治に関わる集まりなどは行われなかった。萬民共同会から7ヶ月後に官民共同会が開けるようになっていたことは市民の意見が受け入れられていたことを示すと言えよう。この時期に入ってから政治家はもちろん、一般市民も政治に関わって発言し、社会活動に参与し始めていた。上掲の記録からも明らかなように鍾路は、市民が政治に自主的に参与しようとする場所であり、反面、皇帝が市民の前に現われ、勅令を公表する場所(史料17)としても用いられ始めていたことが判明する。

また、憲政研究会の動き(史料18)からは、知識層において以前まで主流だった保守的な思考から近代への新しい動きが生まれていたことが読み取れる。

このように、鍾路の一帯は政治家と一般市民がともに集まって議論する場所として用いられていた。鍾路一帯は朝鮮時代における商業空間の役割を果たしてきたが、大韓帝国期において、市民意識が発生し、受け入れられていた点で、政治空間の役割が新たに追加されていったのである。

4-2 消費される空間

(1) 宗教儀式を行う都市空間

朝鮮時代においては、仏教よりも儒教思想が重要視されていた。朝鮮初期まで漢陽の城郭内に寺刹があったが、成宗はより強力な抑仏策⁴²をもって統治していた。そして、ビショップは「最近までの宗教についての無関心は、寺院を全く残さなかったし、孔子の社院を除いては、ソウルには公共の寺院や宗教というものはない」⁴³と述べるほど、漢陽において寺刹はほとんど設けられていなかった。しかし、大韓帝国期に入ると鍾路の一帯で宗教儀式が行われるようになってきたことが次の史料から判明する。

- 19) アメリカのメソヂストの教会で新しい教会を朝鮮のソウルの鍾路に造ったので、…聖殿に多く集まり、礼を行った。『獨立新聞』1896年6月9日)
- 20) 昨日午後四時頃に鍾路に楽器の演奏音が広がって、帽子を被る人数十人があるものを左右から護衛しながら行く。僧さんたちが旗を持って行った。これを調べると一つの石仏を造成して北倉洞まで運ぶところだった。『帝國新聞』1900年5月10日)

大韓帝国期から天主教がソウルを中心として広がってゆき⁴⁴、当時、鍾路で西欧の教会の建物(史料19)が建てられた。人々が鍾路教会に集まり礼拝を行っていたことが分かる。また鍾路一帯の通りを歩きながら、仏教の儀式行事(史料20)を行っていた。このように街並みで行われた行事を人々が見物することができていた。

従って、朝鮮時代の漢陽において、宗教施設や宗教儀式が抑えられていたのとは異なり、大韓帝国期以後は信教の自由が認められ、それは鍾路一帯の都市空間においても、宗教の行事が行われるようになっており、その変化を見せていると言することができる。

(2) 教育や啓蒙運動の発信地

そもそも近代教育が成り立つ以前の朝鮮の教育は、儒教的な価値観に基づく経史の教育が中心であった。つまり、支配層の子弟のための教育であった⁴⁵。しかし、大韓帝国期入ると、宣教師や開化派⁴⁶を中心とする教育や啓蒙運動が始まっていたことが分かる。

- 21) 尹致昊氏がロシアとフランスに行って遊覧して本国に戻った。今月九日、貞洞の培材学堂に来て生徒に対して演説した。その内容は、ロシアとフランスの立派さ・広さ・富国強兵について語った。…我々も開明進歩して他の国の人々と同等になると喜ばしい。『獨立新聞』1897年3月30日)
 - 22) 鍾路で有名な善智識人たちが良い演説をする…『獨立新聞』1898年3月10日)
- 鍾路の一帯における培材学堂⁴⁷などで、教育や啓蒙運動(史料21-22)が起り始めていた。近代化への意志をもって、国民たちを啓蒙しようとする運動が開化派を中心として行ってきたことが分かる。彼らは、国民啓蒙

を通じて富裕な国家が建設できると、西欧文物の見学を紹介していた⁴⁸。

教育の普及は、富裕な国家を作るのが目的であり、こうした教育や啓蒙運動の展開拠点として、鍾路の一角が主に用いられていた。

(3) 祝祭の空間

大韓帝国期以前の鍾路の一角は、商業的な役割に重点が置かれていたが、その後、様々な祭りや行事も行われた。

- 23) 光化門の外で…昨日の夜、(道の)両側に…大小官も老若男女も区別なく(集まっている)。あの人々は観光しているのだろうか。道に一杯で六条の前に人の海ができてるのが不思議である。(『帝国新聞』1898年9月12日)
- 24) 獨立協會が我々の大韓の開国、五百六年の慶祝会を行ったことを載せる。…本会の会員と、政府の大小官と、各学校の生徒と…全部集まった人民の数は数万名だった。…開国の記念演説をした。集まっている人々は皇帝陛下のために万歳をした。…各国の客たちは午後三時に獨立館に招待し接待し、その後会員たちは国歌を歌いながら戻り、宮の前に行く。(『獨立新聞』1898年9月16日)
- 25) 5月5日に東大門の内における電気鉄道の停車場で、内外国のお客さんたちを招待する。大韓の電気鉄道が初めて行う礼式である。その日、…鉄道が走るのは我が国に初めての見物だろう。(『帝国新聞』1899年4月29日)
- 26) 電気会社が昨日から鍾路に三つの電灯を設けた。(『皇城新聞』1900年4月11日)
- 27) 先日から鍾路に電灯三つを掛けて電車が10時まで運行するので、夜ごと鍾路に人が海のように集まって見物する。(『帝国新聞』1900年4月13日)
- 28) 鍾路に電灯の世界が出現した後に鍾路街の夜ごと通明(=明るく)になって、このごろ電灯を点けないようにした。その理由は宮闕の中で電灯を点け始めた上に、さらに鍾路に電車も電灯を点けながら来住するので、宮殿の電灯が明るくなったので鍾路の電灯は無視された。(『帝国新聞』1901年7月26日)
- 29) 商業會議所の中で趙鎮泰・郭泰鍾某某諸氏が商品陳列所を創立すると発起し、事務所は臨時で天一銀行の内に決定した。(『皇城新聞』1905年11月15日)
- 30) 京城商品會議所の附属の商品陳列館は愈々準備が進み、四月一日から開館する。公衆の縦覧を許すのに、同館の目的は、我大韓商工業を改善発達し、我國民に視聴が新鮮な見聞を与え…入場料は金一銭。(『皇城新聞』1907年3月30日)
- 31) 今度東南両大門の城壁毀撤は度支部の所管であるが、該兩門樓を農商工部に付属して博覧会商品陳列に備用とする。(『皇城新聞』1907年8月2日)
- 32) 農商工部で來五月頃に商品陳列館を南大門と東大門に設置する。観覧時間は午前七時から午後六時までとする。(『皇城新聞』1908年4月25日)

朝鮮時代には女性が街を歩くことは儒教思想によって禁止されていたが、老若男女の区別なく、光化門前の六条と呼ばれる街並みを観光する(史料23)ようになったことが分かる。それは女性の活動がある程度自由になっていたことを示すと考えられる。また、建国506周年の記念行事(史料24)は獨立協會が主催し、生徒や市民がこうしたイベントを楽しんでいた。

また電気鉄道の開通の記念式(史料25)が行われていた。当時の電車敷設は、近代化の過程として多くの影響を与えたと考えられる。また、電車を見物するために多くの人々が集まる(史料26-28)など、見学者が多かった様子が窺われる。また、電灯の登場により生活が夜まで広がったことが分かる。

商品陳列館(史料29-32)が1905年から計画され始めて1907年4月1日開館されていたことが分かる。一方、商品陳列館のために城郭を壊したことが史料を通じて分かり、それはソウルの都市空間に、この時期より大きな変化が起こり始めたと言えよう。さらに観覧時間や入場料が定められていた。また、商品陳列館とは、商業の振興のための展示施設であったが、当時においてこうした展示施設の概念はまだ定着しておらず、そのゆえに、商品陳列館としての目的で用いられるより、市民にとっては単なる新たな見物の対象として用いられていたと考えられる。これは開設の時期は不明だが、ソウルの長洞に日本人が設けていた商品陳列所から影響を受けていたと思われる。

商品陳列館や電灯を掛けて走る電車⁴⁹も、新たな見物の対象であり、大韓帝国期以前までは見られなかったものであった。

以上のように鍾路の一角の街並みは、通行の機能のみならず、市民の祭

りや国家的な記念行事などが行われる場としての機能を持っていた。従って、一般市民にとっては、民衆の群れ集う祝祭的な空間として⁵⁰、新たな文物が導入され、市民の目を楽しませてくれることを提供する空間として、鍾路一角の性格は変わっていったと捉えられる。

4-3 新たな認識から都市施設へ

ここでは、都市空間が政府中心から市民中心へと認識が変化していくという視点から分析を行う。

(1) 新たな認識「治道」⁵¹としての認識

鍾路の大通りは、「御路」として、他の場所より重要に思われていた。この時期は、外国との通商が増える時期であり、その観点から道路の改修について意図を捉えられる。

- 33) 鍾路の広い道は朝鮮人と外国人も通っているだけではなく、御路である。その故、去年から警務庁でその仮家を壊して、禁じている。…今まで修理しないので、道路・橋梁・川辺が汚くて不始末で外国人に羞恥になる。(『獨立新聞』1896年5月9日)
- 34) 道を平坦にして橋を丈夫にするのが人民の衛生である。…今国内に外国人も来ているので、さらに道と橋を修築しつつ、川などを綺麗にする。一つは人民の「衛生」のため、二つは外国人に無視されないようにするためである。…(『獨立新聞』1897年4月17日)
- 35) 漢成府の李采淵氏が一昨日各町に告示したことは、川と道路、自分の町を修築して恥ずかしくないようにすることである。(『帝国新聞』1900年4月18日)
- 36) 尹致昊氏が四つの恥辱を書いて新聞社に送り載せている。第一で道路、国中に道路は体の血道のようなことで…道路が狭く、悪いところに良い国はないであろう。…(『獨立新聞』1897年3月30日)
- 37) 道とは、ひとりのものではない…他人の人を考えて通るのがよい。…それで狭い道に馬を走らせることを警務庁が禁じるのは、人民のためのことである。(『獨立新聞』1896年4月21日)

上の記録から(史料33-36)分かるように、当時、都市の基盤施設を修復し、改修する際に外国人の目が認識され、近代化を代表するかのようになり、その政策が優先される傾向があった。そうした政策を定めることは、『承政院日記』によれば「道路橋梁委員。漢城府觀察使俞寅煥」⁵²と道路橋梁委員が設けられているように、その委員会により都市施設の一つとして道路や橋梁に対する改修が行われていたと捉えることができる。そして、西欧の文物として、特に衛生⁵³に関し、目立って認識されていたと言えよう。また『治道略論』⁵⁴も「一に曰く衛生、二に曰く農桑、三に曰く道路」⁵⁵と言うように衛生の強調が見られる。このような視点からみれば、道路の改修は、市民たちの「衛生」が最も重要な目的であった。

一方、外交通商に伴い西洋人が市内に入ってくるに従って、ソウルの中心地である鍾路の一角は、そうした外国人の目にさらされる代表的な空間として、羞恥という認識と市民の生活を良くしようとする衛生としての認識に対応する動きが現れていたと捉えることができる。また、道路は、公共施設であり、個人の施設ではないと認識されていたことが明らかである(史料37)。

(2) 新たな認識による公共施設の整備

大韓帝国期において、公共施設に対する新たな認識が生まれており、その認識から公共の整備が実施されていることが次の史料を通じて読み取れる。また、道路や休憩の概念がどのように考えられていたかについても次の史料を通じて明らかになる。

- 38) 都城から治道を始めて効果があつた後に順次、地方まで拡大して実施することだ。…巡檢が管轄する境界ごとに簡単な公衆便所を設けて、一般人の大小便を解決するようにする。…夜市に対して許可を下し庶民たちが生業を失くさないようにすべきである。(『漢成旬報』1884年7月3日)
- 39) 南大門内の道を綺麗にしようと市場を宣慰庁中に移すつもりだったが、…度支部の大員沈相薫氏は不可能な状況であるという。(『獨立新聞』1896年12月12日)
- 40) 衛生には綺麗が第一で、…道路を広くすることは、車馬往来と荷物の運搬に便利なのは言うまでもなく、人が運動を多くすることになることが一番衛生に良い。

その故に、都城には、大路辺に良い樹木を植えて、隅々に花園を造る。そして、老若男女がみんな出て時折り運動して、心の憂鬱を解消して、良い空気を呼吸して血気が循環するようにする。…(『獨立新聞』1899年2月7日)

- 41) 都市の体面上に甚だ不良だけでなく、その「衛生」上に害悪があることを懼れる。…文明国の都市はこれに注意し、街路は毎日掃除して水を撒布する。…街路(=鍾路通り)について述べれば、公衆便所の設備だ。我国にも都市公衆便所は設けてあるが、その数が甚だ少ない。…今各町に公衆便所を設け、また街路を清潔に保ち、衛生の害を除くことが得策だ。(『皇城新聞』1906年11月15日)

- 42) 京城は…衛生上及び風致保存欠点が多だという議論がある。昨報した高架鉄道を敷設すると同時に市街に一大改革を行う。…(『皇城新聞』1910年1月22日)

上の史料を見れば、(史料 38)都城(=ソウル)から道路の改修が始まっている。これは市民のための商業の中心という認識から道路が改修されるようになり、今までとは異なる現在の意味の衛生(史料 41)としての認識から市民健康のために公衆便所⁵⁶が増設されていたことが分かる。また、道路を美化する認識(史料 39)から露店が禁止され、宣恵庁を市場とする提案があったことが分かる。

しかし、そもそも宣恵庁の倉庫は市民のために様々な用いられていた。『承政院日記』によれば「招集三百余名窮民、招先設賑於宣恵内別倉空廩、日後再食、衣服一襲」⁵⁷というように多くの用途で用いられていた場所であったと言える。さらに交通機能のためだけに道路を改修したわけではなかった。もちろん、今とは異なり、自動車の通行がほとんどなかったため、人々が使いやすかったと思われる。しかしながら、綺麗な街並みを作ろうとしたのは、市民の散策(史料 40)を目的とし、その背景には、国民健康のための認識があった。こうして、道路が広げられ、憩いの空間として街並みを修築しようという新たな価値観の形成があった。ビショップは「木がこんもり茂り森も、広場ももっていない何もない風景だ…長さ数キロメートルであり、その広い道路は現在散歩するのに非常に良く、広く用いられている」⁵⁸と記述している。それは、ここからは計画の意図通りに市民にとって憩いの空間としての役割を果たしていたことが分かる。

さらに、生活の利便性や風致保存(史料 42)への認識が当時あり、その観点より高架鉄道の敷設が計画されていた。当時の風致保存の概念は現在と同意味であり、計画などの方法論が異なると思われる。高架鉄道の計画案があったことは公共工事が単なるソウルの開発のみならず、自然景観の保存を重視していたことが明らかである。

(3) 公共施設の計画や設置

前述した内容の認識があったので、その後、新たな公共に対する計画や施設が登場していた。近代化の過程で行われた道路の修築及び鉄道⁵⁹の敷設はソウルを始めとして地方へ拡大されていた。

- 43) 道を修築するのに、…仮家を壊すと言う。…鍾路から東大門までと、貞洞と西小門までが急務である。(『獨立新聞』1897年4月6日)

- 44) 昨日…廣通橋の隅に編茅した假家を不時に毀撤したといって、橋上交番所も空袋に移設…(『皇城新聞』1898年9月30日)

- 45) 南門内外場の市を宣恵庁内に移設すると紛雑する街路が、人馬往來に便利になるとしたが、近日、市民たちが前と同じように大路上で魚物と果種等属を売買するために、新設市場は稀少して(=利用者がわずかで)あり…(『皇城新聞』1898年11月21日)

- 46) 韓国鉄道増設計画に対して尚今まで内容を詳らかにし得ないが、某通信の報告によれば該計画の中には西大門駅から東大門の方面まで市街を通して高架鉄道を敷設して、火車(=汽車)で市街を通過させる案件も含まれていた。(『皇城新聞』1910年1月21日)

道路の修築や仮家を壊す(史料 43・44)ことは、美化の認識や生活改善という新たな認識が生まれていたためと考えられる。朝鮮時代には、仮家が認められなかったが、『承政院日記』によれば「家屋の中で道路・橋梁・河川を修築するのに、妨害になるものがあれば、内部に報告して市民に報償金をあげて家屋を壊す」⁶⁰と述べ、史料 10 でも記さ

れているように、大韓帝国期には市民の生活を考えながら、仮家は空き地に移すことが認められていた。さらに、南大門周辺の露店を市場に受け入れたことは庶民の生活保障を考慮した一つの方法であったと言える。

史料 39 で市場の計画を述べていたが、その計画案がこの時実行されていた(史料 45)ことが分かる。しかし、市場が設けられていたが、初期段階では定着せず、露店が続けられていたことは、一般市民や商人にとって、まだ道路について公共施設という認識が足りなかったためと考えられる。李ホンチャンによれば、南大門市場は1897年から営業するようになった。このように形成された宣恵庁の倉内場は、南大門市場で毎日夜明けに一時的に開かれた朝市と異なり、一日中都市民の生活物資を取引する常設市場であった⁶¹。『純宗実録』⁶²によれば、「南大門市場で火災があった。火災の被害を受けた商人に特別に救助金 300 圓を下賜」⁶³とあるように、南大門市場は副都心に発展してきたとは見えず、市場として定着するまで時間がかかっていたことが読み取れる。つまり市場は1896年から言及されており、1897年に南大門市場が誕生した。すなわち、この時宣恵庁は市場に変容し、これが現在も存在している南大門市場である。

また、「市街大改革説」の見出しの記事の中に高架鉄道の話が出ている鉄道の増設計画(史料 46)について、単なる開発ではなく、史料 42 で述べていたように自然景観の認識に従って、周辺の景観を考慮する高架鉄道の計画案があったことが明らかになっている。この計画は、鍾路では実現せず、韓国(=朝鮮)戦争後、清溪川の上に高架道路が設けられたことと関係があると思われる。現在でも、高架鉄道や道路に対する景観的な側面には否定的な見解もあるが、当時は、既に新たな計画案で、風致保存を考慮しながら、ソウルを近代化発展させようとしていたことが読み取れる。

このように史料を通じて鍾路の一带は、朝鮮時代にはなかった新たな認識が生まれていたことが明らかになった。この認識によって公共施設の計画や設置が果されていたと言える。さらに、朝鮮時代には王権中心の社会であったが、この時期に入ってから市民中心の考え方が生まれ始めていた。

5. まとめ

本稿では、朝鮮時代からソウルの中心部であった鍾路の一带において、前近代の都市空間が近代化される過程の手がかりを見出そうとした。そして、大韓帝国期に商業中心としての役割を果たした鍾路の一带から、近代の都市空間に求められていた事柄と、国家の意図を検討した。そして、検討にあたって、主に新聞史料と、付加的に政府の記録である『承政院日記』を用い、前近代的都市空間として継承された面と、近代的都市空間として変容した面を捉えることができた。

前近代的都市から継承された面としては、商業空間としての役割があげられる。近代的な商業形態へ変化するものの、「御路」として用いられる街並み、そして、都市計画などの面において、大枠としては朝鮮時代からの性格がそのまま継承されていた。その一方で、都市計画法規は新たに作られており、元々もっていた都市空間の性格に基づき、その上に新たな性格が附加されるかたちで変貌を遂げていたことが分かる。

近代的都市空間の成立と変容については、まず当該地が政治や文化の出発点としての役割を果たすようになったことがあげられる。また、それまでの商業的な役割のみならず、居合わせた客が見学できる宗教や啓蒙運動が行われ、民衆の群れ集う祝祭的な空間としての性格も付与され、こうした活動が演じられるのを楽しむことによって人々が都市空間における体験を消費する空間としての役割を果たしていた。さらに、新たな文物が導入され、政府中心から市民中心の考え方が生まれ始めていた。

本稿では、新聞を通じて大韓帝国期の鍾路の一带を見てきた。その鍾路を中心として、前近代都市空間から近代都市空間へ変貌していく一連の過渡期的な様相を見ることができた。このように伝統と近代が共存していることにソウルの特徴が見出せる。

これ以後の植民地時代については稿を改めて検討していきたい。

図1. Map of Seoul, 1900 年、イギリス王立亜細亞協会所蔵⁶⁴

- 1) 本稿で使っている近代的とは、現代に近いという意味として定義する。
- 2) 孫禎睦『朝鮮時代都市社会研究』（一志社、1980年）p. 32.
- 3) 朝鮮時代の社会を動かしていた支配的な社会階層は士大夫であった。士大夫は、官職を取れば、文班や武班の兩班に属するようになるのであった。それにより兩班というのは、文武の官職を占めることができる社会の身分層に対する称号として使われるに至った。朝鮮時代の社会における政治・経済・文化を動かした階層である。（李基白『韓国史新論』（一潮閣、1998年）p. 236）
- 4) 1883年から登場する新聞記事では、漢陽とソウルという用語がともに使われていた。本稿では、開港以前を漢陽、以後をソウルとして呼び分けることとする。また、大韓帝国期のソウルは現在の市域のうち、漢江北部の一帯に相当する。
- 5) 鄭在貞外2人『ソウル近現代史の紀行』（ソウル学研究所、1996年）p. 34.
- 6) 1894年（高宗31）の政府改編により実施された改革で、身分制度の撤廃を含む社会的な諸改革が行われた。（李基白、前掲書、pp. 376-378）
- 7) 全遇容『近代の鍾路の商家と商人』『鍾路：時間・場所・人』（ソウル学研究所、2002年）p. 129.
- 8) 線麁・綿布麁・綿紬麁・芋布麁・紙麁・魚物麁の六種類を指す。（李基白、前掲書、p. 253）
- 9) 李基白、前掲書、p. 253.
- 10) 乱立して仮家の店舗が建てられることを意味する。
- 11) 李基白、前掲書、p. 301.
- 12) 例えば、朴ソ、鍾路一乙支路地域の街路体系の変遷過程に関する研究、金哲株、韓国の城郭都市の形成・発展過程と空間構造に関する研究、權寧祥、朝鮮後期の漢城府における都市空間の構造」などがある。
- 13) 原田敏一『日本近代都市史研究』（思文閣出版、2002年）p. 15.
- 14) 朝鮮時代における政府の出納機関である承政院の日記である。1623年から1898年までの政府の出納・行政事務などが記録されている。漢文と翻訳文を引用。
- 15) 開化派の周旋として、政府では博文局を設けて新聞を創刊していた。（財団法人信永研究基金、『漢城旬報と漢城週報の翻訳版』、The Korea Herald、1983年、韓国における最初の近代新聞は、朴泳孝氏によってはじめて試みられ、博文局を設ける準備に入っていた。そして、1883年10月1日に創刊され、14ヶ月間10日ごとに欠かさず発行されていた。（鄭在貞外2人、前掲書、p. 52）
- 16) 国漢文とは、ハングルと漢字ともに書き文を示す。
- 17) 韓国における最初の週刊新聞として1886年1月25日に創刊され、1888年に廃刊されていた。本稿では『漢城旬報と漢城週報の翻訳版』を用いた。
- 18) 1896年4月7日に創刊され、1899年12月4日まで発行されていた。初めは隔日刊されており、1899年7月1日から日刊されていた。開化運動の先覚者と言われる徐載弼氏により創刊された民間新聞であった。国文版と英文版に発行されていた。（『獨立新聞の影印本』中央文化出版社、1969年）
- 19) 1898年8月10日に創刊され、1910年3月31日まで日刊として発行されていた。発行部数は2000部程度であった（『帝國新聞の影印本』亜細亞文化社、1986年）。
- 20) 1898年9月5日に創刊され、1910年9月14日まで発行された、日刊の民間新聞であった。発行部数は3000部程度であった。（『皇城新聞の影印本』韓国文化開発社、1973年）
- 21) 1904年7月から1910年8月まで発行されていた。それは日刊新聞として国漢文版・英文版・ハングル版が刊行されていた。発行者はイギリス人であり、実際の責任者は梁起鐸であった。（1904. 8-1907. 4月までは『大韓毎日申報の影印本』、京仁文化社、1976年と、1907. 5-1910. 8月までは『大韓毎日申報の影印本』財団法人信永研究基金、1984年）
- 22) 大韓帝国時期は、一般的に甲午改革（1894年）から植民地時代（1910年）前までと見られる場合がある。あるいは、1896年（高宗33）に建陽であった年号を1897年（高宗34）に、光武元年とし、当時の国号を大韓帝国に変えていた時期と見る場合があるが、ここでは、分析対象の新聞発行期を重要とするため、その時期の設定が異なる。

- 23) 京城協賛会『京城案内』（朝鮮博覧会、1929年）p. 23.
- 24) 『承政院日記-178券』高宗35年（1898年）9月29日、p. 26.
- 25) 日本の金融機関の中に、韓国に最初に進出したのは第一国立銀行であった。開港後の1878年に釜山支店が開設され、1880年元山、1882年仁川、1888年京城に出張所が開設されていた。その後、第二国立銀行・第十八国立銀行・第五十八国立銀行などが設けられていた。（吳斗煥『外国資本の浸透—金融支配』『韓国史44—甲午改革以後の社会・経済的な変動』（国史編纂委員会、2000年）pp. 14-15）
- 26) 『承政院日記-103券』高宗20年（1883年）11月16日、p. 210.
- 27) 宮中料理の関連責任者でいた安シュンハナム氏が、1890年に世宗路の現東亞日報社の敷地にあった明月館という高級料亭を作り、宮中料理を一般人が食べられるようになった。明月館以外にも当時、チャンチュン館・クツイル館・シクド園、テジョ館などの高級料理店があった。（韓福眞『衣・食・住の生活の変化—食・物』『韓国史44—甲午改革以後の社会・経済的な変動』（国史編纂委員会、2000年）p. 475再引用）
- 28) 「御路」とは、国王が行幸する時に用いられていた道の意味である。
- 29) 朝鮮を1894年から1897年までの間に訪問したイギリスの社会学者である。
- 30) I. B. ビショップ著、李インハア訳『韓国とその隣の国』（サルリン図書出版、2003年）p. 67.
- 31) 朝鮮王祖（＝李氏朝鮮）は、建国初期の1392年から法典の編纂事業に着手し、数度の修訂を経て90余年をかけて完成させた。その内容としては、吏典・戸典・禮典・兵典・刑典・工典などが各々規定されていた。（法制処訳『経国大典』（韓国法制処研究院、1993年）pp. 1999-1200）
- 32) 法制処訳、前掲書、p. 512.
- 33) 仮家とは、商業用の仮設建物として木造で草葺で建てられることである。
- 34) 李鍾淵氏の「朝鮮前期における住宅史の研究」では、形態や材料についての具体的な規定が紹介されている。（嶺南大学、博士論文、1991年）
- 35) 「万民公同会」というのは、独立協会の主管する政治的な集会であり、開港以後、外国による近代国家への変化への意志が表明されたことに抵抗し、自主的な独立国家として発展することを目指した。
- 36) 憲政研究会は、李鴻・尹孝定氏などによって発起されていた。その研究会の人々は、国権を守護し、独立を保つためには、政治力が集結される団体の結成が必要であると考えて設立を進めていった。（李松姫『愛国啓蒙運動—愛国啓蒙団体』『韓国史43—国権回復運動』（国史編纂委員会、1999年）p. 189）
- 37) 塔谷公園というのは、現にパゴダ公園と呼ばれ、鍾路の大通りに面している公園である。
- 38) 社交団体と異なることがなかった独立協会は、1897年8月から討論会が作られ、学生や市民が多数の会員として参与し、啓蒙団体へその性格が変わっていた。その後、上訴文を皇帝に告げたことを契機として政治運動団体として再び性格を変えた。
- 39) 鄭在貞外2人、前掲書、p. 83.
- 40) 『承政院日記-178券』高宗35年（1898年）10月30日、pp. 262-263.
- 41) 鄭在貞外2人、前掲書、p. 83.
- 42) 李基白、前掲書、p. 268.
- 43) I. B. ビショップ、前掲書、pp. 79-80.
- 44) 李基白、前掲書、p. 339.
- 45) 憲政研究会「近代教育運動—近代教育の成立」『韓国史45—新文化運動I』（国史編纂委員会、2000年）p. 13.
- 46) 開化派の人物の中で、朴泳孝・尹致昊などは日本の「紳士遊覧団」にも参加し、独立協会の委員だった。尹致昊は、ヴァンダービルト大学及びエモリー大学で学んでのち、上海のミッション・スクール中西学院の教師をした（姜在彦『朝鮮近代史』（平凡社、1986年）p. 132）人物として多くの改革活動していた。
- 47) アメリカ宣教師のH. G. Appenzeller氏が設立した近代式の私立学校であった。半地下1階と地上1階で建てられていた。韓国における最初のルネサンス式の赤レンガ校舎として新築された。（鄭在貞外2人、前掲書、p. 53）
- 48) 邊勝雄、前掲書、p. 19.
- 49) 当時の電車敷設は、近代化の過程として多くの影響を与えた。
- 50) 吉見俊哉『都市のドラマトウロジー』（弘文堂、2000年）p. 8.
- 51) 本稿で使った「治道」とは、道路を改修するという意味である。
- 52) 『承政院日記-169券』高宗33年（1896年）3月26日、p. 174.
- 53) 本稿でいう「衛生」とは、現在の「衛生」とは異なる。ここでは、清潔にして命を守ること、あるいは生活の改良などを意味している。
- 54) 1882年末、朴泳孝などが東京を遊歴した後に、治道（=改修）のため、17条目に成している施行指針が収録された。
- 55) 金光宇『大韓帝国時代の都市計画—漢城府の都市改造事業』『郷土ソウル第50号』1991年、p. 98. 「治道規則」の部分を再引用。
- 56) 『我々の建築100年』では、「1904年6月21日ソウルにおける公衆便所の初登場」（申ヨンプ外2人（ヒョンアン社、2001年）p. 78）と述べていたが、史料31では、1884年7月3日に公衆便所を簡単な構造として設けようとするものが取り上げられていた。しかしながら、筆者は1904年とは10年差があることを考えれば、1904年よりは早い時期にソウルにおける公衆便所が設けられていたと考える。
- 57) 『承政院日記-178券』高宗35年（1898年）8月4日、p. 17.
- 58) I. B. ビショップ、前掲書、pp. 61-498.
- 59) 最初の鉄道である京仁線は、34kmに過ぎない短い路線であったが、政治・経済の中心地であるソウルと、韓国における最大の貿易港である仁川を直結していたと言う点で、非常に重要な意味をもっていた。京仁線の敷設権は、1896年3月29日にアメリカ人のJ. R. Morseに許可され、1897年3月2日起工式が行われていた。（鄭在貞『外国資本の振動—鉄道敷設』『韓国史44—甲午改革以後の社会・経済的な変動』（国史編纂委員会、2000年）pp. 55-56参照）
- 60) 『承政院日記-179券』高宗35年（1898年）. 12. 15、p. 218.
- 61) 李ホンチャン『ソウル経済の変化』『ソウル20世紀の生活・文化変遷史』（ソウル市政開発研究院、2001年）p. 258再引用。
- 62) 韓国において最後の国王であり、その公文書である。
- 63) 『純宗実録4券』1910年5月4日、（純宗実録の翻訳本、社会科学院民族古典研究所（ヨコラン出版社、1993年）p. 335.
- 64) 許英桓『定都600年ソウル地図』（汎友社、1994年）pp. 78-79.

（2004年6月9日原稿受理、2004年10月22日採用決定）